

<報告>

ある夏の日の^{レポート}報告 — IWLに参加して

秋草俊一郎

六月最後の一週間は蒸し暑い日が続いた。アメリカ東北部にあるニューイングランド地方は、夏は比較的過ごしやすいのだが、高緯度ゆえに初夏は日照時間がとても長くなる。特に夏至あたりの数週間は、夜八時過ぎまで明るく、夜になっても日中の熱がひかないまま次の日の朝を迎えることになり、結果、じりじりとした暑さに日夜焼かれているような感覚を味わう。しかも、ここボストンのたいていのアパートには暖房はあっても冷房はついていないので、空調の快適さになれた滞在者には少し困ったことになる。

私は以前やはり緯度が高い中西部で夏を過ごした経験から、暑さは一時的なものだとわかっていたので、風通しをよくするためにアパートの窓とドアを開けはなち、水を張った洗面器に素足を突っこんだ。二〇一三年の夏至を、私はその体勢のままサマースクールの予習をして過ごした。すると思った通り、一週間で嘘のように暑さがひいてしまった。そのあと、一夏通じて三〇度を超えたことは数えるほどしかなかったはずだ。

1

IWL — 「世界文学研究所(Institute of World Literature)」はハーヴァード大学教授デイヴィッド・ダムロッシュがたちあげたプロジェクトだ。「世界文学」は、九〇年代以降、欧米で比較文学を継承する新しいディシプリンとして注目を集めるようになったが、そのアメリカにおける提唱者(のひとり)——『世界文学とは何か?』の著者ダムロッシュは、新興宗教の教祖さながら、世界中を飛びまわって精力的に布教につとめている。世界文学研究所も、その普及を^{ミッション}目的として二〇一一年に設立された。

世界文学研究所の主な活動内容が、毎年六月後半から七月半ばにかけて四週間にわたっておこなわれるサマーコースだ。その開催地も、プロジェクトの趣旨にふさわしく世界中の提携大学から選ばれるが、二〇一一年の北京、二〇一二年のイスタンブールにつぐ、二〇一三年の開催地はここ、マサチューセッツ州ケンブリッジ。ある意味ではホーム・タウンでの開催となる今回のセッションは、第一回の二〇人から一四〇人まで参加者を増やし、その国籍もカナダ、フランス、イタリア、ドイツ、ポルトガル、トルコ、台湾、中国、スロベニアなど、二〇か国近い国の出身者が——文字通り世界中から、ハーヴァード大学に集う。基本的に大学院生以上が参加資格だが、実際には意欲ある学部生、すでに大学で教鞭をとっている教員、フリーの翻訳家など、バ

ックボーンもさまざまな受講者が、世界文学の秘鑰^{ひやく}を手にとり遠路はるばるやってくるのだ。そして現在、客員研究員としてハーヴァード大学比較文学科に居候させてもらっている私も、この集中セミナーに参加させてもらえることになった。

六月二四日の初日、参加者は比較文学科の研究室があるディナ・パルマー棟でレジストレーションをうけなくてはならない。そこで、後日配布される参加者全員の名前をプリントした記念Tシャツのサイズを聞かれ、セミナーごとに製本した冊子がぼんと手渡される。これは両面コピーで何百ページもあって、さながら電話帳のような代物だ。それ自体はアメリカの授業^{コースワーク}では珍しくないが、今回は一学期間ではなく、それぞれ二週間で消化しなくてはならない。毎日のリーディング課題をこなさなくては、議論に参加するどころか、講師の話についていくこともできないから、これを読みとおせることが最低限の参加資格になる。

その後、キャンパス北のイェンチェン・ホールに移動して主催者ダムロッシュ教授によるウェルカム・レクチャーと、比較文学科の院生によるハーヴァード大学の学内ツアーが済むと、早速、四週間ぶっ続けでおこなわれるセミナーが始まる。プログラムの幹となる演習^{セミナー}には、ダムロッシュ教授はもとより、比較文学のジェラルド・カードイル、アメリカ文学のワイ・チャー・ディモック、翻訳研究のスーザン・バスネットといった各界を代表する名だたる研究者が講師陣として名を連ねている。

前後期一ダースを超えるセミナー・リストから、受講者はあらかじめ二つを選択することになる。私は前期には、テンプル大学教授ローレンス・ヴェヌティの「翻訳の理論と実践」を選んだ。翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）は、欧米では九〇年代からポストコロニアリズムが提起する他者の問題と連動する形で、一躍脚光を浴びるようになった学問分野だ。とはいえ、そのような難解な理論から、言語学的な分析、より実践的・実用的なケース・スタディまで多岐に及ぶため、（文学研究がそうであるように）とても一言では説明できるようなものではないが。その中でもヴェヌティは、翻訳研究をディシプリンとしてたちあげたスーザン・バスネットと並ぶ翻訳研究界のレジェンドだ。編著書も数多いが、おもに異化翻訳や同化翻訳といった概念の提唱者として知られている。

私も主著である『翻訳者の不可視性——ある翻訳史』*The Translator's Invisibility: A History of Translation*（一九九五年）や、編纂した論集『翻訳研究読本』*The Translation Studies Reader*（二〇〇〇年）といったすでに翻訳研究の古典になった書籍を通してヴェヌティの名前は知っていたが、実際にこうして本人を目の前にしてみると、思い描いていたような気難しそうな老大家などではまったくなく、がっしりした体格に、人懐こそうな笑みを浮かべた好人物だった。フィラデルフィア生まれのフィラデルフィア育ちのイタリア系移民三世のヴェヌティ教授は、イタリア語はもちろん、スペイン語、ポルトガル語、カタルーニャ語などにも通じた、ロマンス語のエキスパートでもあり、そのそれぞれの言語から英語への翻訳を手掛ける「実践者」としても名高い。演習の初めに「理論なくしての実践はありうるが、実践なき理論はありえない」と、

参加者に明言した教授に私は好感を抱いた。

演習はヒエロニムスから、ゲーテ、ニーチェ、ベンヤミンまで、翻訳を論じた古典的なエッセイを読んでディスカッションするという、翻訳研究の授業としてはきわめてオーソドックスなものだったが、一味違うのはヴェヌティ教授が翻訳者としてのスタンスを前面に打ち出してくることだった。常にゆっくり大きな声で話してくれるヴェヌティ教授の主張は、その発音と同じくらい明瞭だった。

「翻訳における道具的モデル vs. 解釈学的モデル」と副題に銘打たれたこのセミナーで、ヴェヌティ教授は一貫して後者を熱烈に擁護する。「道具的モデル」とは、翻訳が、機械翻訳のように、単語と単語を置きかえていく作業の延長線上に実現されるという考え方だ。それに対し「解釈学的モデル」は、翻訳とはテキストに対するひとつの解釈だという立場だ。工業製品の取り扱い説明書、外交条約、契約書、旅行パンフレットエトセトラの翻訳と異なり、文学作品の翻訳は、どこかで訳者の解釈が入りこまざるをえず、「道具的な翻訳」はありえない。そのことを、ウッディ・アレン『アニー・ホール』の脚本の仏訳やイタロ・カルヴィーノ『レ・コスミコスケ』の英訳を実践例として参照しながら、いかに訳文に訳者の解釈が介在しているのかを説明していく。日本にも訪れたことのあるヴェヌティ教授は、イタリア名産のリコッタチーズをクリームチーズと英訳することの愚を、お好み焼きをパンケーキと訳してしまうことになぞらえて力説してくれた。

ヴェヌティ教授の著『翻訳者の不可視性』は、翻訳者たちが——翻訳という行為自体が——伝統的に目に見えないものだったという主張に貫かれているが、実際に欧米の翻訳書では、訳者の名前は、本のジャケットはおろか、内表紙にさえ表示されていないことが多かった（最近は大いぶ改善されたが）。翻訳書は売れないので、その本が翻訳であること自体、出版社はあの手この手で隠蔽しようとするのだ。そもそもアメリカは翻訳にたいして圧倒的な「黒字国」であり、膨大な輸出量に比して輸入は少ない。外国の文化への関心が総じて低いのだ。自然、翻訳は軽く見られ、訳者のステータスも低くならざるをえない。

「道具的モデル」という翻訳に対する考え方が一部ではびこっているのも、こうした背景に加えて、欧米の言語の特殊な事情が反映している。基本的にヨーロッパの言語は、言語学的にみて姻戚関係にあり、文法や語彙など共通点も多い。英語とフランス語、英語とドイツ語といった言語のあいだだけで考えていたのでは、翻訳は単語と単語の単純な置き換えで可能なものと、一般に思われてしまうのも無理はない。セミナーに出席して、ある意味で、北米における翻訳者へのめぐまれない境遇が、ヴェヌティ教授に名だたる理論書を書かせたのだと納得がいった。ヴェヌティ教授自身も、いまもカタルーニャ語からの英訳詩集を出してくれる出版社を探しているのだという。「これで断られたのは六社目だよ」ヴェヌティ教授は肩をすくめる。ヴェヌティ教授ほどの実績のある翻訳者・学者が、訳書をなかなか出版できないというのは驚きだった。こういった背景事情は、なかなか著作を読んでいるだけでは伝わってこない。

しかし、他方で日本から来た私のような参加者には、「解釈学的モデル」というのは、

翻訳をするうえであまりに自明な前提のように聞こえてしまったことも事実だ。日本で翻訳と言え、俗にいう「横のものを縦にする」ことであり、文法も語彙もまるで違う異質なアルファベットを、かなと漢字の混成表記に移しかえることだ。私は自分でも少し翻訳をするので身に染みているのだが、翻訳に直接携わらない人間でも——たとえば英文和訳の難しさを受験勉強で経験した程度、グーグル翻訳などの機械翻訳のでたらめな日本語を知っている程度でも——外国語を自国語に移し替えることが機械的な作業でできるものではないことは、直感的にわかっているはずだ。

アメリカと日本での翻訳の扱いの違いは、翻訳家のステータスの違いにもあらわれている。日本では翻訳はアカデミックな評価こそさほどではないものの、翻訳家の地位は欧米ほど低くはない。現代でも少数だが著名な翻訳者も存在すれば、訳者で読む作品を選ぶ読者もいる。これは日本に留学している中国の邵丹さんが主張していたことだが、村上春樹など、小説家として十分知られながらも、翻訳をする作家もいる。訳者の名前がいかに重要かは、ときに人気作家が無名の訳者の訳書に名前を貸す下訳制度が存在することからも明らかだ。その場合、訳者の存在は消えるどころか、実作者の名前以上に大きく本のジャケットに印刷されることも少なくない。これは「翻訳者の不可視性」とは一八〇度違う、「翻訳者の（過度の）可視性」といった事態ではないか。ほかにも日本と欧米の翻訳文化の違いを教授や参加者にも話してみたが、どこまでわかってもらえたかどうか。世界（文学）規模で翻訳について考えるなら、今後東西の価値観の違いに自覚的になる必要がお互いにありそうだ。

2

IWLのサマーセッションには、メインプログラムのセミナー以外にもいくつかのアクティビティが設けられている。セッションのもうひとつの目玉はレクチャーで、セミナーの講師陣のほかには有名な研究者を招き、キャンパス内の講堂でおこなわれる。初日の^{キーノート・スピーチ}基調講演をつとめたのはハーヴァード大学教授ホミ・バーバだった。インド出身のバーバは故エドワード・サイードと並んで、ポストコロニアル理論の批評家として世界的に知られている人物だ。後になって知り合いから聞いたのだが、ハーヴァードはこの著名な学者を、彼が著名だからというまさにそれだけの理由で、九〇万ドルの年俸をだして買った。北米の大学では資金的に恵まれた少数の有力校が、有名教授を買い漁って、年俸と学費を釣りあげるといった事態が起こっているが、バーバはまさにその好例だ。私が知るバーバは、ティーチング・オブリゲーションもなく、なにかのグルのように、トーガのような独特の装束でハーバードヤードの緑の芝生を悠然と歩きまわり、学生たちに満足そうにうなずきかけている老人だ（年間九〇万ドルがあれば、いったい何人の若手の優秀なレクチャーを雇用することができるのだろうか？）同じ比較文学科に所属しながら、バーバの警咳に接する機会があったのは、二〇ヶ月の滞在を通じてこのときが最初で最後だった。そのトニ・モリソンの詩「これは誰の家？」をめぐって展開されたレクチャーは、私には英語も内容もトゥー・デンスだったが……。

ほかにもニューヨーク大学教授エミリー・アプターが出たばかりの著書『世界文学に抗して』 *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability* (二〇一三年) についてレクチャーしたと思えば、その後のディスカッションの席でヴェヌティ教授が、そこで論じられている「翻訳不可能性」という概念が、「道具的翻訳」的な考え方からきた誤謬なのではないかと、厳しく追及する一幕もあった。

さらに、セミナー・レクチャー以外にも豊富なプログラムが用意されている。全員参加のものとして、アフィニティ・グループのミーティングがある。参加者はセミナー以外に、それぞれの関心にもとづいて「国家と地球」「オリジナリティとイミテーション」「モダニズムとポストモダニズム」「中心と周縁」「翻訳」などグループにふりわけられ、そこで出席者同士で発表をおこない、ディスカッションして関心を共有しようという内容だ。これが週二回、一回二時間程度ある。そのほかにも学術出版や、就職のためのレクチャー、親睦を深めるためのレセプションといった至れり尽くせりの内容だ。そのうえオプションで美術館ツアーなどのレクリエーションも選択できる。

予習に追われていたため、残念ながらレクリエーションに参加する時間はとれなかったが、それでもレクチャーのあとのレセプションにはできるだけ参加して、受講者同士親睦を深めた。セッションの趣旨を鑑みるなら、本来なら国籍関係なくさまざまな参加者と交流するのが望ましいのだろうが、なぜかアジア人同士で固まってしまうことが多かった。アジア人と言っても、そのほとんどが中国からの参加者だ。中国語圏からの参加者は、すでにアメリカで勉強している留学生ふくめ二〇人以上を数え、開催国アメリカに次ぐ派閥を作っていた。この IWL のサマーセッション自体、二〇一一年の第一回は北京でおこなわれ、今後も二〇一四年の第四回は香港、二〇一七年の第七回は台北での開催が決まっていることを考えると、世界文学の未来は中国語圏が握っていると言えそうだ。ちなみに日本からの参加者は（東京大学からは先ほども触れた中国出身の邵丹さんが参加していたが）、私だけだった。日本では六月はまだ学期中なのでしかたがないとはいえ、この現況はやや寂しい。だが、ポジティブにとらえれば、「世界文学」に日本が貢献する余地は大いに残されているということもできる。

3

七月四日の独立記念日——この束の間の休日の夜には、私も予習の手をとめて、アパート沿いの記念道路^{メモリアル・ドライブ}にでて、ボストン・ベイエリアで盛大に打ち上げられた独立を祝う花火を眺めて楽しんだが——を挟んでセッションが再開される。セミナー後半には、私はハーヴァード大学比較文学科教授カレン・ソーンバーの「世界文学と環境危機」を受講することになった。

現在、カレン先生は比較文学科の大学院生を相手に教鞭をとっているが、本来は東洋文学研究、とりわけ日本文学研究でキャリアを築いてきた研究者だ。翻訳も待たれるモノグラフ『動的テキストの帝国』 *Empire of Texts in Motion: Chinese, Korean, and Taiwanese Translations of Japanese Literature* (二〇〇九年) は、大日本帝国の植民地におかれた朝鮮、満州、台湾などで、日本文学がどのように流通していたかをめぐり、

中国語・朝鮮語・日本語の資料を縦横無尽に駆使した六〇〇頁に及ぶ大冊だ。この目覚ましいデビュー作の序章で、著者は「比較文学の未来は、部分的には文学の交渉が形づくる星雲のダイナミクスをより深く探索することであり、人文系の地域研究の未来のためには、地域的、グローバルな視点で、文化的な生産物を調べる必要がある」と言い切ったが、その信条を環境文学という新たなフィールドで実践したのが、二冊目の著書『エコアンビグニティー—環境危機と東アジア文学』 *Ecoambiguity: Environmental Crises and East Asian Literatures* (二〇一一年) であり、環境文学の枠組(フレーム・オブ・リファレンス)を東アジアに拡張しようとした野心的な試みになる。文字通り洋の東西を問わず、膨大な作品を博搜した第二作は、第一作よりもさらに分厚い七〇〇頁の大冊だから驚かされる。そして現在も、また新たな「世界文学」の領域にのりだした第三作の出版を準備されているようだ。二〇〇七年に博士号を取得したばかりで比較文学科の教員ファカルティのなかでも比較的若い、細身のカレン先生のどこにこんな分厚い研究書を次々に執筆するエネルギーが隠されているのか、まったくわからないと研究室で院生は噂しあっていた。

私がカレン先生の授業をとるのは、このサマーセッションが初めてだったが、二週間のコースを通じて、すっかりファンになってしまった。該博でエネルギーながら、嫌味がなくだれにでもフレンドリーに接する人柄の持ち主で、金髪を耳のあたりで切ったカレン先生が、長身に颯爽とスーツを着こなして入ってくると教室が活気づいた。アメリカでは学生でも教員のことをファーストネームで呼ぶことが一般的だが、本稿でも親しみ(と敬意)を含めて「カレン先生」という表記を使わせてもらった次第である。

セミナー「世界文学と環境危機」は、カレン先生自身の著書も含めたいくつかの論文とともに、環境文学の作品を実地に読んでいくセミナーだ。「環境文学」は、翻訳研究以上に一般に知られていない分野である。実を言うと、私自身環境文学にはなじみがなく、高校のとき授業で読まれたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』ぐらいしかイメージが浮かばなかったのも、事前のセミナーの選択希望では第三希望にも含めなかった。そのため、このクラスに配属されたとき、不安も大きかったのだが、結果的にはいちからその梗概を学ぶことができ、充実したセミナーになった(とはいえ二週間の短期間では、とても完全に理解できたとは言えないが)。

急に「環境文学」と言われても、なにか特別なジャンルの文学を指すような印象を受けて身構えてしまうが、じつはそうではない。また、文学を通じて環境問題について考えたり、環境思想エコロジーを学ぶようなものともかぎらない。もちろん、(『沈黙の春』がそうであるように)そうした要素はあるが、そうした見方は対象を狭いジャンル意識に閉じこめてしまってむしろつまらない。とくに構えずに、自然(環境)と人間の描かれ方に着目して作品を読んでいくことが第一だ。だから、作品のどこかに自然の描写がふくまれていれば、それはもう「環境文学」になりうる……こういったことはみ

な、カレン先生の授業をつうじて学んだ¹。

授業の初日には、カレン先生は万葉集から舒明天皇の国見の歌をとりあげた。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国
原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ あきづしま 大和の国は

大和の国には多くの山々があるが、いちばん近くにある天の香具山、そこに登り立って国見をすると、広い平野には、かまどの煙があちこちから立ちのぼっている。水面には、白いか鷗の群がしきりに飛び立っている。素晴らしい国だよ、(あきづしま) 大和の国は。(佐竹昭広、山田英雄、工藤力男、大谷雅夫、山崎福之校注『万葉集 (一)』岩波文庫、二〇一三年、五四—五五頁。)

そして、この歌のなかに、早くも日本人の自然を愛でる目と、環境破壊(煙立ち立つ)が同時におこなわれていることを演習の参加者に指摘した。これは明らかに、日本でもっとも古い「環境文学」のひとつであり、同時に俳句や和歌で自然を詠んできた日本に豊かな環境文学の水脈があることを示すものだ。

4

日本文学における環境文学の(隠れた)系譜は興味深いが、あくまでこのセミナーの眼目は「世界文学」として環境文学を位置づけることにある。今日、環境問題は地球規模の問題であるから(中国の大気汚染が隣国にとっても深刻な問題であるように)、環境文学もまたグローバルな規模で再編されなくてはならない。

欧米に加え、中国、台湾や朝鮮の環境をテーマ(のひとつ)にした日本では手に取る機会がなかった作品群を英訳で読んでみると、身近にありながら看過してしまっていた文学世界の蒙を開かれる思いがした。阿城(一九四九—)の『樹王』や、韓国の女性詩人キム・ヘスン(一九五五—)の詩など、いままで読んだことがない作品に目を通すことができた。

リーディング・リストには万葉集以外にも日本の作品——石牟礼道子の『苦海浄土』や、放浪詩人ななおさかきの詩など——も含まれている。日本のゲイリー・スナイダーとでも言うべきななおさかきの詩「いつか」は、3・11のあとの今だからこそ読まれる詩である(おかげで、ほかの受講者の前で詩の中に出てくる「高速増殖炉 もんじゅ」を英語で説明するはめになった)。また、『苦海浄土』を英訳 *Paradise in the Sea of Sorrow* (リヴィア・モネット訳)として読むのは、なかなか他ではできない体験だった。

よく知られているように、『苦海浄土』は本文に水俣の土地の方言を随所にとりこん

¹ 近年、日本のエコクリティシズムについて概観する書籍が出た(カレン先生の文章もふくまれている)ので参考にあげておく。小谷一明、巴山岳人、結城正美、豊里真弓、喜納育江編『文学から環境を考える——エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、二〇一四年。

でいる。とりわけ、作者が「聞き書き」をしている部分は土地ことばが生のままで写しとられているような箇所も多く、水俣の外に住む読者に一読して意味をとりづらい。それが作品に（「聞き書き」であるかのような）臨場感を生んでいるのだが、これが英訳になると、そういった方言による効果はほぼ消えてしまう。たとえば、冒頭の漁師の「よんべは、御所ノ浦泊まりで、朝のベタ風の間に、ひとはしりで戻って来つけた」という台詞は、”I passed the night in Goshonoura and came back this morning during the morning calm”と方言を排して訳されてしまっている。両版を読み比べると私のような東京方言の話者には、むしろ英訳のほうが直感的に意味をつかみやすいことは確かだ。しかし、それは他方で作品の重要な魅力が失われてしまっていることも同時に意味している（ちなみに、このような外国文化の異質性を自国文化にひきつけるように訳す翻訳を、ヴェヌティ教授は「同化」翻訳と呼んで異議を唱えている）。

こうした原文と翻訳にかんする情報を参加者と共有しつつ、ヴェヌティ教授のセミナーを受けた直後だったからだろうか、私が口にしていたのはこの『苦海浄土』という物語全体が、むしろ翻訳研究の方法論で書かれたもののように読むことができるということだった。『苦海浄土』には方言だけでなく、所々に医師が書いた報告書や、事件を報じる新聞記事、チッソとのあいだにとりかわされた契約書などが挿入されるが、これは前述の土地ことば——方言部分と著しい対照をなしている。もし、水俣での一連のできごとが翻訳されるべき「^{オリジナル}原本」のようなものと仮定するならば、前者を「道具的翻訳」と、後者を「解釈学的翻訳」（のようなもの）と呼んでみてもいいかもしれない。たとえば、冒頭に置かれた「山中九平少年」の章では、語り手の目、耳を介した一六歳の水俣病患者、九平少年の日々の暮らしの生き生きとした描写に続けて、「細川一博博士報告書」なる文章が唐突に全文挿入される。その無機質なレポートで少年は「四肢の痙性失調性麻痺と言語障害を主症状とする原因不明の疾患」の患者の一人にさせられてしまうのだ。また九平少年の姉のさつきの壮絶な死は、『熊本医学会雑誌』のなかで「四十四号患者」についての所見としてたんたんと処理されてしまう。報告書やカルテ、補償をうたった契約書のグロテスクさが示唆するのは、個々の人間の苦しみや命が、症例や金銭に道具的に翻訳しうるという思想である。

ただ注意すべきは、語り手の記述もまた、オリジナルそのものではなく、あくまでも訳者の手を介した「解釈学的翻訳」だということだ。『苦海浄土』文庫版に付された有名な解説で、作家の渡辺京二は、世間の耳目を集めたこの作品が、一般に思われているような「聞き書」やルポルタージュの類などではなく、石牟礼道子による一種の「私小説」なのだとしている。実際、水俣病患者へのインタビューも一、二度しかおこなわれず、それもテープレコーダーなどを使ったものではなく、著者が記憶を頼りに再現したもの、あるいは再創造したものだということを暴露するのである。「証言」の典拠を求める渡辺の問いに石牟礼は「だって、あの人が心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの」とこともなげに答えたという。つまり、水俣病患者やその家族、漁民の体験をどう文字化し、流通しうるかたちにしていくのか——本書のそのプロセスにおいて石牟礼道子による解釈と翻訳がほどこされていると見るべ

きなのだ。本質的にはカルテや保証書と同じ「翻訳」ながら、限りなくヒューマニスティックな解釈としてこの『苦海浄土』は差し出された。その点に自覚的であるからこそ、『苦海浄土』は今なお紋切り型の近代批判、文明批判を超えた価値を持っている。

こうしたふたつの「翻訳」のコントラストで『苦海浄土』は書かれているのではないか——こんな思いつきをクラスで口にしてみたのも、ヴェヌスティ教授の翻訳研究のセミナーに触発され、さらに日本語と英訳で本書を併読したからにほかならない。見慣れていたはずの自国の文学にたいしてこのような視座をもたらしくれるのも、「世界文学」の効用のひとつだろう。ダムロッシュの著書『世界文学とは何か?』によれば、世界文学とは「一つの読みのモード、すなわち、自分がいまいる場所と時間を越えた世界に、一定の距離をとりつつ対峙するという方式である」ということだが、私と日本との「距離」が新しい読みを生むわけだ。

私の思いつきはともかく、池澤夏樹編集の『世界文学全集』にも日本文学から唯一収録されたこの環境文学の古典が、社会的な側面が注目を集めたがゆえにかえって文学研究や批評のシリアスな対象になることが比較的少なかったのは残念である。

5

環境文学のセミナーも後半にさしかかったある日、東独の女性作家、クリスタ・ヴォルフが一九八七年に著した長編『チェルノブイリ原発事故』を読んでディスカッションをしていたとき、原発の必要性の有無をめぐってベルギーとフランスからの参加者の間で議論が白熱してしまい、珍しく場が緊張してしまったことがあった。議論は早口の英語でおこなわれたため、全部理解できたわけではないが、狭い地域に国家がひしめきあっている欧州では、自国が原子力発電所を停止させても、他国の汚染の影響を受けやすいため、ナーバスになるのは理解できる（おりしも、スイスの原子力発電所そばの飲用水としても用いられている湖から、セシウムが検出されたというニュースが報じられたばかりだった）。ちょっと変な空気になったところで、授業の終わりにカレン先生に話を振ってもらったが、とっさのことにうまく答えることができなかった。

情けない話だが、言葉に詰まってしまったのは必ずしも英語の表現力の問題だけではない。私が二〇一三年の七月時点で感じていたことを正確に伝えることは、日本語ですら難しかっただろうし、クラスで交わされていた議論は、クリスタ・ヴォルフのテキストからも、そして二〇一一年三月の私の実感からも遠いように思えてしまったからだ。

『チェルノブイリ原発事故』の語り手の女性は、遠方の町でおこなわれている兄弟の脳手術の結果を心配しながら、事故のニュースを追い、迫りくる黒い雲に怯えている。その一日分の独白が、もともとは『事故——ある日の報告』*Störfall: Nachrichten eines Tages* と題されていたこの作品の内容のすべてだ（その意味で、邦題はややミスリーディングだ）。語り手は（とくに声高に原子力廃絶を訴えるわけではなく）たんたん日々を送っているが、その意味は「事故」の以前とは決定的に違っている。

たとえば、作中には頻繁に「食べる」シーンが出てくるが、いつもと同じ黒パンと卵の朝食をとっていても、どのくらい汚染されているのか考えずにいることはもはやできない(だが、なにも食べずにいることももちろんできない)。語り手の女性は魚は「放射能の貯蔵庫」とわかっていながら、漁師のウムブライトさんの、脚が悪いおかみさんから鰻を買ってやり、苦勞してさばき、調理して食べるのだ。

ウムブライトさんのおかみさんが帰ってから、わたしは鰻をブツ切りにしはじめました。包丁の先がふれると、鰻はピクピク動きはじめましたが、頭を落としてもう首のない鰻を小さく切り分けているうちに、その一つがテーブルからはね落ちて、床のタイルの上でグロテスクな死の踊りをおどりはじめました。わたしは背中から頭の髪の毛の付け根まで鳥肌が立つほどぞっとしましたが、大声で、なあに、気のせいよ！ と叫び、鰻を一匹づつぼろ布でしっかりくるんで切ってしまいました。歯をしっかり噛みしめていたためか、その後はうまく口が開かないほどでした。(クリスタ・ヴォルフ『チェルノブイリ原発事故』保坂一夫訳、恒文社、一九九七年、一二六頁。)

私がこの場面を読んで思い出したのは、直前に読んだ『苦海浄土』の一節だった。その結末近くで、語り手は漁師の夫を亡くしたおばさんが遠洋で採ってきたと主張する春のわかめを、本当は有機水銀の排出口近くで採れたと知りつつ、義理をたてるために買って味噌汁にして食べるのである。

結局のところ、私がセミナーで環境文学のいくつかの作品を読んで感じたことは、作品の中のそういった身振りの、生活のディテールの生々しさだった。それはひょっとすると二〇一一年三月以前に作品を読んでいれば、気づかないとは言えないまでも、強くひっかかりはしないようなものだったかもしれない。人災によって汚染されてしまった土地で、人々は自分を最終的に死に追いやるかもしれないものを飲み、食べている——たとえ、今後有機水銀の排出が規制され、原子力発電所が廃絶されたとしても、そうした事故は、人が文明に拠って生きるしかない以上、これからもどんな形でも反復されうるだろう。もし、「事故」のあとに文学を読む意味があるとするれば、原子力発電の是非をめぐる論拠にするよりも、そうした日常の描写をこそよすがにすべきなのではないか。

私は次の日のセッションで、こうした自分なりの考えを——もっと整理されていない形だが——ほかの参加者に話してみた。いつもながらぎこちない英語なので、うまく伝わったかどうかはわからない。だが、こうした言葉や文化の摩擦、伝わったか伝わらなかったかわからないもどかしさもまた、世界文学のひとつの醍醐味なのかもしれない。

6

七月一九日、セッション最終日は、参加者全員にダムロッシュ教授から終了証が手

渡される授与式のあと、打ち上げにボストンのダウンタウンに繰り出した。会場は水の上、二階建ての客船を借り切ってボストン湾をクルージングだ。

船上で振る舞われた飲み物と食べ物、そして月明かりに照らされたボストン・ベイエリアのスカイラインを楽しみながら、自分たちが訳した日本語版『世界文学とは何か?』を読んでもらっているという韓国の教授と名刺を交換したり、ルイジアナでアメリカ文学を勉強している中国人留学生と共通の知人の消息を聞いたりした。そして、また何年先かのセッションでの再会を約束しあったりした。

そして、世界文学の使徒たちは、また世界中に散っていったのだった。

.....
【著者紹介】

秋草俊一郎 (AKIKUSA Shun'ichiro) 東京大学大学院博士課程修了。博士(文学)。ウィスコンシン大学マディソン校名誉客員研究員(2009~2010年)。ハーヴァード大学客員研究員(2012~2014年)。東京大学教養教育高度化機構講師。専攻は英米文学、ロシア文学、比較文学、現代文芸論など。

